





その白衣の人は、右の足が義足でした。

待合室のソクリートの上を歩くと、音に、コソソ、コソソと、音がしました。

みんなは、すぐ、その人に気がついていましたが、遠足帰りや、へんげんに疲れていましたから、知らん顔をしていました。

しかし、その白衣の人が、みんなの掛けているソチの前へ、近づいて来たとき、

みんなは、「うっ、うっ、鼻をおさえて、逃げました。

へんにおうのです。

白衣も、いざやろにあかじみていました。ましてやその白衣に包まれているからには、一層さらわれていました。

いく日も、風呂に入っていないことが、すむわかるほど、手や首に、黒く垢がたまっていました。

白衣を着けて、戦闘帽をかぶっているところを見ますと、きんぐ、まだどかの病院に、入っているのに違いありませんが、白衣の人たのいる病院って、そんなにひびいとろろなんでしょうか。

その人らしく、その人の右足は、かけがえのない、大切な右足であたはずです。

それを、太もものあたりから斬り落とす、赤茶けた木でつくった義足をはかせたのは、いったい誰だったのか？

ゲンタロウは、はじめから、立っていました。だが、ゲンタロウだけは、ひとり頑張り、逃げだしました。

逃げるみんなに、つきあたられながら、にがい顔をして、袖がはまたように、突立ついました。

鼻をおさえて逃げるみんなを、白衣の人は、「ふんふん、うっ、うっ、さびしそうに笑いながら、見まわっていました。

笑ったに、義足の足が、コソソと低くなりました。



白衣の人は、やがて、ベンチに腰をおろすと、義足の足を、不恰好に前に突き出したまま、よれた布のカバンからパンをだして、おいしそうに食べはじめました。

いったん逃げたみんなは、いつの間にか、遠くからその人を囲んで、珍しいものを見るように、眺めていました。

パンを食へおわった白衣の人は、みんなの水筒を指さして、  
「水をいっぱい飲ませてくれませんか。」

と、丁寧に頼みました。  
だが、だれひとり、飲ませてやろうというものは、いませんでした。

いや、なかには、わざと水筒をぶちまけて、  
「残っているけれど、きたないからやだ。」

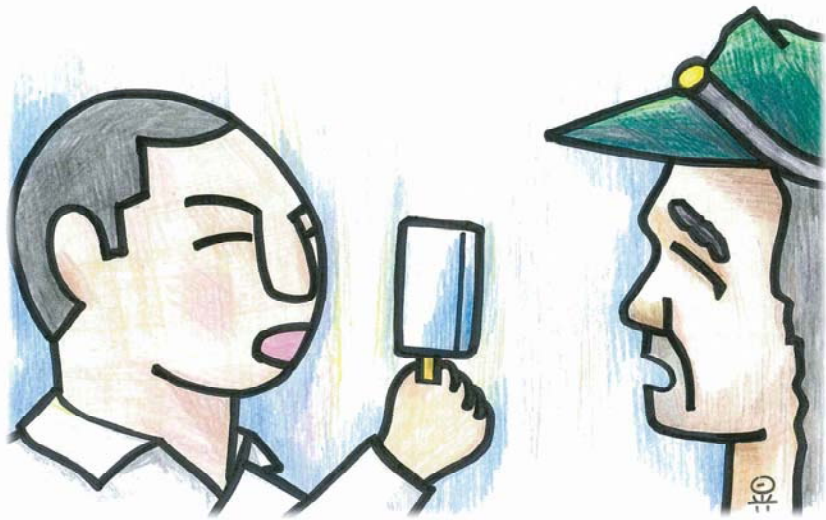
と、言っただやうがいました。  
みんなは、どうと笑いました。

とんでもないことです。いくら、小さな子どもだからといって、それは、あまりにも、ひどい言葉でありました。

しかし、ひどいやつは、きたないと言った、それだけに限ったことではなのです。

黙っていても、白衣の人にそそきかけている、みんなの目つきは、全部とて、  
いい程、ひどい目つきをしていました。

その白衣の人を、さげすんでいました。



ゲンタロウは、くちびるをかみしめて、そういうみんなを、きつい目をして、睨みつけました。

心の中では、泣きたかったような、激しい怒りが燃えた、からだがかぶるふるふるえましたが、ゲンタロウは、それをじっとこらえていました。

こらえながら、ポケットのなかへ手を突っ込んで、財布をさぐってみますと、たった十円だま一枚しか、残っていませんでした。

ゲンタロウは、すぐに売店へかけていて、アイスクャンデーを一本、買ってきました。

そして、みんなをわしのけて前へでると、白衣の人に、それを、

「はい。」

と、言って、さしだしました。

白衣の人のなげだした義足は、驚きのために、またコソソとなりました。

白衣の人の目が、よこれた顔のなかで光りました。

「く、く、くださるんですか、わたしに？」

世の中の、冷たい扱いになれた手が、わなわなとふるえながら、一本のアイスクャンデーをつかむのを、ゲンタロウは、じっと見つめました。



汽車の連絡が悪くて、家へ帰ったのは、九時を過ぎていました。

おとうさんと、おかあさんは、そんな時間になるまで、夕飯を食へないで、待っていてくれました。

夕飯を食へながら、聞かれるままに、ゲンタロウは、今日の遠足の、おもしろかった話など、いろいろ話して聞かせました。

しかし、帰りの駅であつた、白衣の人の話は、しませんでした。



夕飯がすむと、開けはなした座敷の電灯の下で、おとうさんは、新聞を読み、おかあさんは、編み物をはじめました。

いつもと違って、ゲンタロウは、それとなく、おとうさんの顔ばかり見ていました。

毎日、書斎で、本ばかり読んでいるおとうさん。

そして、新聞や、雑誌に、原稿を書いて、ゲンタロウのほしいていっものは、何でも買ってくれるおとうさん。

突然、ゲンタロウは、立ち上がると、飛びつくようにおとうさんの背中につかまって、

「肩を叩いてあげる。」

と、言いました。

突然のこと、おとうさんもおかあさんも、びっくりしました。

いままでは、そんなやさしいことを言うのは、いせんもなかつたからです。

「いったい、どうしたの、うんだい？」

と、おとうさんは、にこにこして聞きました。

「うん、どうもしてない。ただ、何となく、叩いてあげたくなただけ。」

と、ゲンタロウは、答えました。

「ほう、何となくか。」

でも、その申し出は、大層おとうさんご、喜ばせました。



ゲンタロウのおとうさんも、競争で右足を失い、義足をはめているのです。

おとうさんは、なげだした義足の右足を、右の手で持ち上げ、そっと向きかえると、ゲンタロウのままだに、岩のように頑丈な背  
中まきでいて、

「ああ、そんなら、ひどう、たのむぞ。」

と、言いました。

ゲンタロウは、心をなやめ、その肩を叩きました。

遠足で、からたはすばかり疲れていましたが、ゲンタロウには、ふじぎたの仕事は、ちとむらやたは、悪くありませんでした。

いや、かえって、何だか、どこも嬉しくってたまらなげ武持ちでした。

すると、そのとき、飛行機のような、翼の音をたてて、一ひきの大きなカフトムシが、灯りをしたって、部屋の中へ飛び込んでき  
ました。

カフトムシは、電灯のまわりを、静かにひとまわりしますと、どうも悪たまのか、なげだして、おとうさんの義足の上へ、着  
陸しました。

よりによって、そんなむかしいどムシ着陸するなんて、おかしいやつです。

なにしろ義足は、赤茶けた、つらつらした堅い木です。

だから、ういんとするのです。



カフトンは、だから、六本の足に力を入れて、ふんばって、そのまま、じっとしていました。  
肩を叩きながらゲンタロウは、じっとしているカフトンの、黒く光った小さな目、ふんばりがきました。  
何かしら、きもち、本当のものをみつけているような、とてもいい目でした。

ゲンタロウは、見世物を見るように、白衣の人を、とおまきに囲んで、その人をさげすんでいた、みんなの目を思い出しました。

(あんな目は、またない目だ。本当のものを、よく見つけなくて、舌面だけをなめて、じっとした目だ。)  
と、思いました。

ゲンタロウは、あのとき、心のなかで、いばいに怒りを燃えたせながら、それを言葉に出して、みんなに告げなかったことを、いま、はきりと後悔しました。

無理におもて、辛抱するどころか、はきりと叫びましたのです。

叫びたにように、みんなの目を、本当のものが見える、清らかないい目にかえてやるべきだったのです。

(ようー)

と、ゲンタロウは、心の中で、ひとりで、決心するのです。

(誰が、白衣の人を、あんな可哀想な姿にしたのか、それを、今度からは、はきり言ってやる。何も、おとうさんが、戦争で足を失っているからと、いって、遠慮することはない。)





カブトさんは、いかめしい兜を突き立てたまま、やはり「と」していました。

あんまりじとしているのよ、おとうさんは、ゲンシロウの肩叩きを止めさせ、カブトさんが、すべり落ちないように、気を付けながら、その鎌足を持ちあげて、

「こっつ、おれの大事な足を、クヌギの木と間違えて、穴でも掘だす気じゃないかな。」

と、冗談を言いました。

それから、

「ゲンシロウ、こいつを外へ逃がしてやってくれ。」

と、言いました。

「よかったです。」

ゲンシロウは、早速つるつるするカブトさんの、腰いからたきまむで、その顔に、

「おとうさんの夢だに穴を掘って、甘い汁を出してごないよ。くぬぎ林はあちにあるよ。あ、そこへ飛んでおゆき。」

と、いってやちて、それから、空高く、ほい、と、投げてやりました。

そとは、あかるい月夜でした。